

大阪新美術館建設準備室 研修報告書
「生田花朝資料調査」

外部研修生 楠井ひかる

はじめに

本研修では大阪新美術館建設準備室が所蔵している、大阪で活動した日本画家・生田花朝（明治 22 年－昭和 53 年）による下絵と書簡の保存環境の整備と調査を行った。

生田花朝については、今日ではあまり取り上げられていない画家ではあるが大阪の風俗画を多数描き、過去には師の菅橋彦と併せて展覧会（1979 年 4 月 7 日～5 月 6 日 倉吉博物館「菅橋彦・生田花朝女名作展」など）が催され、昭和 51 年には生田花朝だけを取り上げた画集『生田花朝女』が刊行され、今後注目されるべき画家のひとりとして考えられる。今回は、2016 年 8 月 5 日・10 日・16 日・18 日・19 日の 5 日間で行った研修について報告する。

下絵の保存環境の整備と調査

研修の 5 日間の内 3 日間で下絵類の調査を行った。作業内容は、大阪新美術館建設準備室より以前の所有者による保管状態を、傷みが抑えられるように配慮して整備し初期調査を行った。下絵は膨大な量があったため、本画により近いだろうとの判断から大きなサイズのものから調査を始めた。

整備に関して、作業前は紙箱のなかに何点かの資料を重ね簡単に折りたたんだ状態で 20～50 点の下絵が収められていた。まとめられた一束には関連性が推測できるものもあったが（修正前後や、大きな作品の部分を描いた下絵の集まりなど）、関連が分からないものや洋紙と和紙、絹など様々な支持体の資料が雑多な状態で保存されていることが印象的であった。調査後は資料同士が触れ合わないよう薄様を用いながら、出来るだけ折りたたまないことを念頭に保存箱に収納した。また、今回の作業には資料への番号付けも合わせて行ったが、作業前の段階で一まとまりになっていた中で関連性が推測できるものには「6-1」「6-2」のように後から見ても関係が分かるように配慮した。

調査に関しては、写真撮影、採寸、技法や材質・描かれたモチーフやテーマ・形状などの記録、過去の刊行物を頼りに作品との関連付けをした。併せて、内1日で調査した内容を自身が担当し、資料のリストと調書【付属資料1】の作成も行った。

資料は和紙に墨・鉛筆・淡彩で描かれたものが多く、モチーフは祭の風景や子どもと大人が連れ立って歩く縁日の様子が多くみられた。また近代以前の装束を身に着けた人々がほとんどで、古典的で大阪の風俗画を得意としたとする花朝作品の特色がよくわかる資料であった。これら以外にも大陸の様子を題材にしたもの【図1】や、洋傘を描き込み当時の様子を反映させたもの【図2】もあり、全体を通しては子どもを描いた作品が多かった。

また、重ね貼りの多用や胡粉を修正液のように用い【図3】何度も描きなおしている点も目立ち、作品を完成させるまで細かなところまで何度も試行錯誤していたことが読み取れる。その他、グリッド線が画面全体に引かれている下絵（付属資料1②）や、色の指定が鉛筆で書かれた下絵もあり、今回の調査内ではその理由は分からなかったものの、これらは今後生田花朝の創作やその環境を考える手がかりになるだろう。

今回参考にした刊行物（主に画集）に掲載されている作品と調査した下絵との関連付けは、おそらくこの作品だろうと判断できるものもあったが、結びつけられないものも多くあり画家として花朝が精力的に活動していたということが伺える。

書簡の保存環境の整備と調査

研修5日間の内2日間で生田花朝が残した関連資料の整理を行った。関連資料も下絵と同様に大阪新美術館建設準備室以前の所有者が保管していたままの状態であったため、写真や、展覧会の目録などの印刷物、書簡（封書・はがき）などが同じ箱の中に収められていた。そのため、最初にそれぞれの分類をし、最も数の多かった書簡（封書）を整備・調査した。

整備方法は、資料同士が触れ合わないよう配慮し薄様で包み、約10～20ずつ小分けの袋に入れて一つの保存箱の中に収めた。このとき、生田花朝の師・菅楯彦をはじめ、重要だと思われる人物が差出人の書簡は、箱の中でも区別しまとまりを持たせて保存している。

調査は、資料に番号を与え、封筒とその内容部分の写真撮影、書簡の構成（封筒、便箋など）や差出人・消印の日付・簡潔な内容の記録をした。

研修で学んだこと・感想

私自身がこれまで目にしたのは生田花朝に限らず、展覧会に出品された作品や、画家自身が完成作として発表したものがほとんどだったためこれだけの量の下絵を目にするのは初めてだった。下絵からは、一つの絵画に対して何度も構図を考え試行錯誤をしながら作品を生み出す過程をひしひしと感じられた。

生田花朝は、今回の研修がきっかけで初めて知ったのだが初めて見る画家による、初めて見る絵、特に今回は材料や技法にほとんど違いが無い下絵からそれぞれ特徴を見出し、リスト化し調書を作成することがとても難しかった。研修では下絵の重要性にも改めて気付かされたと同時に、能動的に資料から情報をつかもうとする姿勢が必要であると学んだ。

また書簡の調査もさせていただいたが、整備と全体を把握する初期調査が目的であったためその内容にまで踏み込むことはできなかった。それでもその記録の過程で、どんな目的で送られてきたのか大まかに内容を読み取りながら作業を進めていく中で、その人がどのような環境で制作していたのか感じられ興味深かった。その反面、下絵調査でも感じていたことではあるが、より知識がないと理解できないことの多さも痛感した。

今回の研修で行ったことは学芸員の職のほんの一部であるが、一次資料に触れることも調査に携わることもこれまでにない貴重な経験だった。実際に資料を扱うときにどのような点に気を付けなければならないのか、記録するときに注目すべきところ、保存についてなど、直接お話を聞き体験しなければ分からなかったことが多くあり、指導していただいたことは大変勉強になった。何より初期調査ということで、開くまでどのような資料かわからなく毎日緊張感を持ちながら新鮮な気持ちで取り組むことができた。今後は、様々な角度からより画家に近づいた研究をするために今回学んだこと・感じた事を活かしたい。

【付属資料1】 調書例①

生田花朝資料

1	祭 神輿 馬に乗り天狗の面を付け た人 住吉大社か	鉛筆・墨・淡彩、 紙	137×93	メクリ 重ね貼り	20160816
---	---------------------------------	---------------	--------	-------------	----------



【付属資料1】調書例②

生田花朝資料

3	遊ぶ2人とそれを見る多数の子どもたち (画集 50 春昼) グリッド線の書き込み	墨・鉛筆・赤鉛筆・淡彩・胡粉、紙	112×154	メクリ 重 ね貼り	20160816
---	--	------------------	---------	--------------	----------



中央付近

赤鉛筆でグリッド線が画面全体に引かれている



【図 1】



【図 2】



【図 3】



図3 左下拡大
胡粉を用い修正している

ⁱ 望月 信成編『生田花朝女』清文堂出版 1976、
菅 真人監『菅楯彦・生田花朝女名作展』倉吉市博物館 1979、
『浪花慕情：菅楯彦とその世界』大阪商業大学商業史博物館 2014、
『菅楯彦展：浪速の粹雅人のこころ』鳥取県立博物館 2014、
『きらめく日本画コレクション』大阪新美術館建設準備室 2014 参照。